婦人と新社會

山田わか主筆

五月號

- 統一か調節か
- 貞操の進化
- 本能崇拜
- 凌辱事件に附て
  - 半獸人の横行
  - 性慾亂用の遺傳
  - 不注意が大敵
  - 强い貞操觀念の缺乏
  - 婦人の取るべき態度
- タイラニーかアナーキーか
- 有閑階級婦人に對する私の實感
- 死苦の影像◎留守居
- 教育社會學講話

毎月一回一日發行　第三十九號　大正十二年五月一日發行

婦人と新社會

五月號

統一か調節か

基督教の權威を削いだ原因の主なるものは、如何なる問題でも如何なる災害でも神の名によつて説明し、神の名に托して、あてのない望みに人を生かして置かうとして、研究しなければならないものも研究せずに置いた處にある。

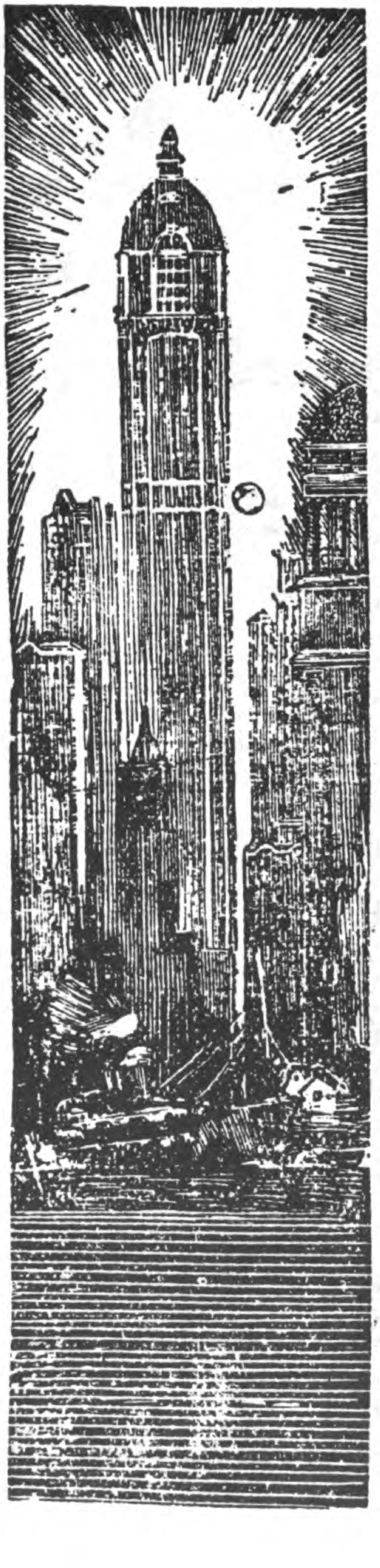
けれども、其の安價な安心立命は基督教に於てばかりではない。社會主義的の政治論或は經濟論は各々其の詳細の點に於ては多少の違ひがあつても、資本主義を倒すことによつて一切の問題が解決されると云ふ信仰を持つてゐる點に於ては皆同じである。

資本主義を倒すことによつて、政治法律經濟、實に、哲學文學宗教に至る迄・完全なる發達を遂げるものと信じてゐる。現に、露國は其れを實行した。

けれども、幼稚な基督教徒が神の名によつて難問題を解決しようとして失敗に終つたと同じ轍を踏みつゝある。

凡ての社會問題を一筋で解決しようとして失敗に終つた例は餘まりに多い。

社會改善は過去の經驗を出來得るだけ多く利用し、あらゆる異つた議論を統一することの代りに調節することによつて達せられる。



貞操の進化

凡そ人間が人間生活のために有益な、そして、美しい習慣又は性質を獲得するには必ず永年の峻烈な訓練を經なければならないものでありますが、其の例を、社會學者ウオードは勞働の進化に關して面白く書いて居りますから、御紹介して見ます。

『經濟學者、社會主義者、政治家、及び、産業革命家は他の方面に於てはどんなに異つた意見を持つて居ても、經濟上の意味に於ての凡の價値は勞働に原因すると云ふこ

とに關しては皆一致してゐる。併しながら、彼等の大抵は、人間が勞働するのは自然であるやうに、人間はうつちやつて置いても働くものであるやうに、そして、問題は如何にして充分な仕事を各人に與ふべきかであるやうに考へてゐる。

『成程、今日の文明社會に於てはさうであるかも知れないが、併し、本來の問題は如何にして人々を働かさしむべきかであつた。此の點に關しては人間は根本的に變化してゐる。現代の勞働者は熟練勞働者でも不熟練勞働者でも、彼等の元始時代の先祖とは全然其の性質を異にしてゐる。野獸が食物を得るために努力する努力を勞働と稱することが出來ないと同じ意味で元始時代の人間が食物を得るために働いた其の働きを今日の意味の勞働と云ふことは出來ない。

『社會が構成される前、つまり、征服時代に於ては征服者も被征服者も繼續的に勞働をすることが出來なかつた。又して居なかつた。彼等が繼續的の勞働の概念を全然持つて居なかつたと云ふことは、今日猶存在してゐる野蠻人に付て研究された凡ての事

實から最も安全に推測される。そして、こう云ふ種類の人間は今日の産業界に於ては全く無價値のものである。彼等の生産力は全然無である。

『現代社會の訓練された勞働者と、訓練されてゐない野蠻人の勞働者とを對照して見ると人間の性質のうちに非常なそして重要な變化があつたことが分る。そして、人間はどうして繼續的に働くことを學んだか？　生存の必要が彼に克己を敎へ、彼の野性を矯め、そして、彼の肉體及び精神をして毎日勞働を繼續するように訓練したか？と云ふと決してさうでない。

『繼續的に勞働をするように人間に訓練を與へたものは單なる生存の必要ではなく、それよりも遙かに强い命令的壓制的な或る必要であつた。則ち、奴隷制度と云ふものが出來て始めて人間は繼續的に働く習慣を獲得した。征服者の目的は征服其のものから最大なる利益を得ることであつた。そして、被征服者が持つて居るもので永久的に價値あるものは彼等の勞働力であつた。其の當時の人間の智力がどんなに低くても其

の利益を見逃すことは出來なかつた。そして、事實として又歷史として其の利益が發見され利用された。

『其の場合の被征服者の勞働する動機は自分の勞働の結果を自分が享有しようと云ふ慾望ではなかつた。其れは鞭が恐しかつたからであつた。奴隷は働かなければならない。でなければ、主人の鞭を受けなければならない。鞭でも働かなければ拷門で働かされる。拷門をかけられてもまだ充分に働かなければ殺される。昔の奴隷制度の慘酷であつた歷史は筆紙に盡し難い。

『けれども、此の慘酷な歷史的事實が人間に繼續的勞働の習慣を造つたのである。元始時代の所謂自由な、他の言葉をもつて云へば、氣まぐれな生活から、其の壓制勞働の生活に迄の大變化に順應出來なくて命を失つた者の數は到底數へきれない。故に、生き殘つた者は其の大變化に耐へ得た者で彼等は子孫を殘すと同時に其の子孫に自分等が獲得した我慢の力を傳へたのである。

『勞働する資格は標本的な獲得性であつて、これが親から子に、子から孫にと代々傳へられて、ツイに、人間は單調な勞働に日々從事し得るような性質を造り上げたのである。此の眞理は社會學者及び人類學者によつて、既でに認められてゐる。けれども經濟上其の偉大な重要さ、引ひては社會を建設するに如何に其れが重要な條件であつたかと云ふことは殆んど無視されてゐた。』と云ふのであります。

其處で私は考へるのです。貞操と云ふことに關して、まだ、多くの男子が野獸のやうであるに反して（勿論、極く少數の男子は普通一般の女子よりも高尙な貞操觀念を持つてゐることを認めますが）女子が比較的强い貞操觀念を持つてゐる。つまり、異性に對する愛を一人の異性に集中する性情を持つようになつたのも、永年の間いろ〳〵の事情が女子に愛を一つに集中しなければならぬように敎へ、訓練して來た結果であらうと。（尤も最近に至つては自由思想の美名の下に女子の貞操觀念も餘程變つて來てはゐますが）

男子は貞操と云ふことに關しては敎へられなかつた。本能の動くまゝに放任されてあつた。其のために今日の進んだ文明を享有して居ながら、猶、且つ、性的道德に關しては多くの男子は野獸に等しい、否、文明人の皮を被り、知識と云ふ武器を以て巧みに其の毒牙を逞しくするのであるから其の害は一層恐しく、危險が多いと云ふことになります。

勿論、昔の奴隷制度を現代に於ては斷然承諾出來ないと同じように女子の貞操と云ふ觀念を一人の男子の專有慾の滿足と見ることは斷じて肯定出來るものではありません。けれども、たとへ、偏頗な習慣であり制度であつたとしても其れが女子の愛を純化する上に効果があつたであらうと私は考へるのです。

現に、我が國現存の法律は有夫の女の貞操破壞を罰して有妻の男子の貞操破壞を寬容して居るので、可なり婦人間に問題になつて居るのでありますが、もし、女子も男子と同じように愛を二つにも三つにもすることが許されてあつたならば、矢張り男子

と同様に女子の愛慾の本能も奔放であつたかも知れないと私は思ふのです。

働かなければ鞭で打たれる、それでも働かなければ拷門にかけられる。それでも働かなければ殺されると云ふ恐れが人間を働かせ、繼續的に働く習慣を人間が獲得したように、一人の男を守つて居なければ、昔なら、殺される、稍進歩してからは、殺されなくても殺されるよりも苦しい飢餓の鞭を受けなければならないと云ふことが餘義なく一人の男を守るようになり、其の習慣が母から娘に、娘から孫娘に傳へられて、ツイに、女性は一人の異性に愛を集中する性情を獲得したのだらうと考へるのです。

命が惜しいために、又は、食ふために貞操を守ると云つたならば、現代の自覺ある婦人は或ひは憤死するかも知れません。けれども、發達の最高に達してゐる人間は、今日鞭を恐れて働くのでないと同じように、現代の自覺ある婦人がさうするのではなく、發達の過程にある婦人に付て云つてゐることを餘事ながら御斷りして置きます。

其の外に、女性の貞操を完成するに與つて力あつたものは、强い母性であつたと考

へられます。其れに付てドラモンドは云つてゐます。

『性の存在を愛の存在と同一視するのは誤まつてゐる。發達の程度の低い人種の男女の間には愛と云ふものは無かつた。愛情の何等の表現なく結婚生活は營まれてゐた。愛が兩性を結び付ける要素ではなかつた。して見ると愛は情慾から發生したものではなく、愛は愛以下の或るものから進化したものではなく、最初から愛として生れたものである。そんならば、此の世界を美しく彩る、其の愛は何處から生れたかと云ふと、それは母であつた。母性愛が生れる前には此の地上には愛情と云ふものが存在してゐなかつた。男は女を愛しはしなかつた。女も男を愛することを知らなかつた。

『女の胸に秘められてある愛の祠を、女自身も意識して居なかつたし、彼女の夫も亦其の存在を知らず、其の扉を開いて見ようともしなかつた。けれども、彼女の赤子の柔かい手が其の扉を開いて美しい新鮮な愛の芽を日光にあてた。其の愛は決して情慾ではなかつた。其れは決して利己的でなかつた。それは、神が人類に與へた最も美

しい最も貴い賜物であつた。そして、其の香ばしいかほりはだん〳〵と擴がつて行つて此の地上を神聖にした。後に、赤子の其の柔い手は父の精神の目に觸れた。父と母は赤子のなかだちによつて新らたに目覺めた愛を基礎に再び結び付けられるようになつた。」

と云つて、ドラモンドは母性愛を高調して居るのでありますが、實に、女子は内的には此の母性愛に刺激せられ、外的には男子及び社會からの壓迫を受けて貞操を全ふして來たと私は考へます。

で、男女關係に關する今日の問題の焦點は、男子と婦人によつて異る性的道德及び法律を一つにしようとすることでありますが、これは全く至當な要求であります。

けれども、今日迄の女權主義者の要求には重大なる錯誤のあつたことを私は認むるものであります。つまり、彼女等の要求は男子の生活を標準としてゐるために、貞操に關しても男子と同等にならうと主張しました。男子の不貞を許して、女子の不貞を

のみ責むる道德律及び法律が不公平極はまるものであるのは云ふ迄もありませんが、それを公平に同一にするためには、永年の間苦しい犧牲を拂ひ、訓練を經て、やうやく、愛を純化し得てゐる女子の貞操を標準とすべきであつて、何等の犧牲を拂はず訓練を經てゐない男子の野性を標準とすることは斷じて誤まつてゐると私は考へるのであります。

女子の不貞を罰して男子の不貞を寛容してゐる我國現存の法律に對して、婦人矯風會は『女子の不貞を罰すると同樣に男子の不貞をも罰せよ』と要求し、それとは反對に婦人聯盟では『男子の不貞を寛容すると同時に女子の不貞を寛容せよ。』と云ふやうな意味の主張でありますが、實に、理想として、婦人も男子も等しく法律などの束縛から脫せしめて、性的道德に關しては各自の德義心によりかゝつて居たいものでありますが、併し其の德義心を私共が當てにして間違ひないと云ふ時はまだ遠い未來に屬してゐると私は考へます。

一體、法律と云ふものは其の時代の有數な優れた國民を標準とするものでなく、人格の高い有數た國民のためには法律などは用がないので、人格の高くない凡てに於て低級なうつちやつて置けば如何なる害毒を社會に流すかも知れない一般國民を標準とするものでありますから、矢張り、どうしても法律の制裁が必要であると私は考へます。

もし、今日の奔放なる男性の本能の跋扈を何等かのかたちに於て制裁しないならば社會秩序は脅嚇され、可憐な女子の人身御供は絕へないでせう。

此の頃頻出する凌辱事件の場合ひのようなのは勿論のこと、有妻男子の姦通を嚴罰する法律を規定して置くと同時に、永年の訓練の結果確實に貞操觀念を獲得した女子は、此の點に關しては男子を敎育して行く態度に出なければなりません。男子の野性を模倣し、折角獲得した貞操觀念を捨て、戀愛の自由の名の下に男子と同じような放埒な性的關係を結ばうとすることは進步の逆戾りであることを現代の婦人は知らねば

なりません。

男子の貞操の强要に對する男子側のいつもの抗辯は男子と女子とは性慾の差がある こと、其の上に女子には姙娠分娩と云ふ役目があるから、到底、一人の女子が一人の男子に滿足を與へ得るものではない、と云ふのでありますが、さう云ふことが既でに男子の獸性を暴露して居るのであります。

動物及び野蠻人には食慾と生殖慾の外には何にもありません。ですから、其の食慾を滿すためには自分のものも人のものも區別がありません。生殖慾を滿たすためにも相手を選みません。けれども、現代男子の多くは食慾に關して可なりの訓練を經てゐますので、『渴しても盜泉の水を飮まず』と云ふような氣分を持つてゐますが、生殖慾に關しては全くの野蠻人で、一人の女では足りないなどと野性を發揮して恥づるを知りません。彼等は、動物や野蠻人が持つてゐない精神と云ふものを文明人は持つてゐなければならないと云ふことを知りません。

女子並に精神的發達を遂げてゐる男子は前述のようなことは口にするさへ恥づべきことだと思つてゐます。文明國の人間らしく精神的に發達してゐる人は、たとへ、男子でも愛を二三にしたり、愛なき女性を相手にしたりすることは殺人罪よりも重大なる罪惡だと思つてゐます。

けれども、現代の大部分の男子は半野蠻人です。そして、其の半野蠻人を文明人らしく敎化して行くことが現代の自覺ある女性の重要なる任務であることを切に感じてゐます。

本能崇拜

人間は單純な現象に對しては文明人であるが、併し複雜な現象に對しては依然と野蠻人である。昔の野蠻人が電力を左右し或は利用することが出來なかつたと同じように、今日の人間は社會力、即ち、元始的の食慾と愛慾をだ左右することが出來ない。いはんや利用することは出來ない。

昔は、役病を神の怒りと信じてゐたと同じように現代人は人間の凡べての禍根源なる其の元始的な本能を自然性、又は人間性として祭り上げようとしてゐる。

そして、其の本能を祭り上げようとするものは現代のイズムである。殊に文學である。



凌辱事件に附て

半獸人の横行

凌辱事件に脅かされて實に世間は戰慄してゐます。世間は、今、戰慄してゐるのですが、併し、それは事件が偶々表沙汰にされたからであつて、つまり、社會上幾分の地位を占めてゐる人々の間に起つたゝめに騷がれるようになつたので、實は此のような慘劇は常に行はれてゐる。唯、世間一般の目に觸れずに居るに過ぎないのだと云ふことは誰にでもうなづくことの出來る事實です。

それが、どの位の數に上つてゐるかは暗から暗へ葬られてゐる我が國では知る由もありませんが、佛蘭西では一八五一年から一八七五年の間に法廷で扱つた凌辱事件は

二二〇一七件であつて、其のうち一七六五七人の被害者は子供であつたと云ふことです。佛蘭人よりも我が日本人の方が道德觀念が强いと斷言出來ない以上もし我が國に於ても、一々此の事件が表沙汰になつたならば佛蘭西に於けるよりも其の數は多くとも決して少なくないと思ひます。神戶に於ける、及び、橫濱に於ける、及び其の他の此の度の被害者に對しては本當に同情の言葉がありませんが、とにかく、それが導火線となつて其の方面に社會の目が向けられ輿論が喚起されるようになつたことは、被害者達の幾分の慰めであろうと思ひます。そしてこう云ふ機會に私共は女性全體の利益の擁護に關する具體的な一階級が造り出されることを望みます。

現代人の凡ては、皆、文明人であるかのような誇らかな顏をゐました。處が、案外其の本性は野蠻人であつて、其の獸性を露骨に現はされたことによつて驚愕しました。

實に、現今の大部分の人間はまだ半野蠻人であります。其の獸慾を逞しくすること

は男の特權でゞもあるかのように考へてゐる人間がまだ少なくないのです。其の上に現今の思想の動搖は人々を快樂主義へ〳〵と引つぱつて行きます。つまり、今日の道德上の無政府狀態が人々をして快樂主義へ〳〵と流れさせるのです。そして、快樂主義が優勢であるのは社會が病氣にかゝつてゐる症候であり、そして、其の病氣は主もに神經衰弱であるのです。

快樂主義が性慾の亂用となり、性慾の亂用は神經衰弱となり、活悲劇の亂發となるのです。性的作用に付て詳細な研究をしてゐるクラフトエッビシグ博士は云つてゐます。『性的作用の變態は殊に文明國人に多い。そして、其れは生殖機關の亂用から來てゐるのであつて、そして、又、生殖機關を亂用すると云ふのは神經中樞が狂つてゐることに原因する。で此の神經中樞の狂ひは大抵遺傳であつて、そして、其の遺傳は要するに他の生理的の缺陷に原因するが、とにかく、生殖機關は其の作用に於て神經中樞に重要な關係をもつてゐて心理的及び生理的の作用に重大なる影響を及ぼすからし

て、性的作用の亂用に原因する神經病者及び精神病者は實に澤山ある。』と。

かくの如き、神經衰弱にかゝつて居る半獸人が人間界を横行して居るのですから實に危險此の上もないことです。彼等が全くの野獸ならば（前にも云つた事ですが）私共は充分に警戒しますから其の毒爪にかゝる場合が少ないわけですが併し彼等は文明人の皮を被り其の上に知力と云ふ武器を所持して居るので其の危險が一層甚大です。

性慾亂用の遺傳

獸的行動に出てまでも性慾を亂用しようとする病的性質はクラフトエビング博士が云ふ通り、個人遺傳によつても傳はるし、又、社會遺傳も優勢なものであることを私共は注意しなければなりません。つまり、性慾の亂用を挑撥する社會の空氣に付て私共は考へなければならないのです。有害な其の空氣が充滿してゐる國は文明國にも非文明國にもありますが、我が國の如きは甚だ遺憾ではありますが、此の點に關しては先づ最も劣等に位する國であると云はれても止むを得ないだろうと思ひます。

我が國では幾人かの男子が集りさへすれば公私の場合を問はず、平氣で猥褻な言語が弄されます。それを恥づる處ではなく、却つて通人を氣どつてゐると云ふ有樣です汽車の中でも電車の中でも飮食店でも、又は、路上に於ても、猥褻な言葉は亂發されもし、僅かばかりの酒氣を帶びてゞも居る時には到底聞くに耐へない會話が取り交はされます。從つて、其の影響が子供に迄も及ぼして子供達迄が大人同樣に不謹愼な言葉を平氣で用ゆるようになります。それが則ち社會遺傳です。

隨分、外國にも猥褻な出版物があります。けれども、我が國のように大びらで平氣で不謹愼な會話をしてゐる國はありません。殊に、我が國では田舍地方へ行くならば一層甚しいし、又、路傍で仕事をしてゐる職人などは、通行の婦人を大聲で批評し、そして、其れは殆んど必ず猥褻な批評です。で、こう言ふ社會遺傳が常に風儀を亂しつゝあると云ふことは餘まりに明らかな事實です。其れが性慾の亂用を誘導しつゝあるのです。そして、其の惡社會遺傳は益々烈しくなるとも決して減退する機會がない

のです。

尤も、性慾に付いて深い研究を積んでゐる或る學者は云つてゐます。『一體、男と云ふものは生れながらにして、暴力によつても女子を犯す特性を持つてゐる。唯、敎養によつて、周圍の事情によつて、及び、烈しい制裁によつて、無理に其れを控へさせられて居るに過ぎないものだ。』と。

ですから、最高知識の所有者であろうが、博士であろうが、高位高官にある人であろうが、もし、彼に人間的道德的な修養がなく、致命的な嚴しい制裁がなく、そして其の機會が與へられてあるならば、彼が暴行を敢へて爲すことは當然であるかも知れません。

けれども、當然であるから止むを得ないと云ふのでは決してありません。病犬が人を嚙むのは當然だと云つて、嚙まれても止むを得ないと云ふのではないと同じように、さう云ふものであるから嚴重な注意が必要であることを云ひたいのです。

舊式の支那婦人はどんな重病にかゝつても斷じて男醫者を自分の部屋へは入れないとかで、それを非文明、頑迷、固陋だとして人が笑つて話して居るのを聞いたことがありましたが、文明國である筈の我が國婦人が追々其れ等の支那婦人に倣つて、男醫者を自分の身邊に近かづけない工夫をするようになつたことは何と云ふ皮肉でせう。

不注意が大敵

實に、婦人は非常に危險な環境に取り卷かれて生活してゐます。勿論、此の危險は今始まつたものではありません。けれども、男子と同じく不健全な社會遺傳を受けてゐる女子は貞操に關する良心を痲痺させられて居るようなことはないかどうかを私は考へさせられます。

暴漢は憎んでも〳〵猶餘りあるものであるには相違ありませんが、一體、凌辱された婦人側にも餘まりにウカツであつたと云はれる點がないかどうかを考へるのです。充分なる注意が行き屆いて居たならば、さうならなくても濟んだろうにと思はれる點

があるのです。避ければ避けられる災害を避けなかつたと云ふことは被害者にも幾分の落度があると見なければならないように思はれるのです。

不幸な被害者を責めるようになることは情に於ては忍びないことでありますが、併し、大野博士の場合に於ても、娘があんなにされる迄保護者達が氣付かずに居たと云ふことは、何としても大きな落度ですし、もし、注意深い人達であつたならば大野の人格に付ても何等か知る處がありそうなものであつたと思はれますし、又、神戸の事件にしても、たとへ、どんな事情があつたにしても世間がスッカリ寢しづまつた時分に若い婦人が一人ウロ〳〵して居たと云ふことが大間違ひでした。

貞操を蹂躙されるか、生命を奪はれるかと云ふ場合ひにはどうすればよいかと云ふ問題が、よくありますが、此の『貞操か？　生命か？』と云ふような危機に遭遇するようになることが、第一に不注意の結果です。

男女平等説が稱へられて以來、女子は自分の身邊を保護されることを潔しとしない

傾きがありますが、體力に於て現に男子よりは遙かに劣つてゐる女子が常に周圍の保護を受けなければならないと云ふことは當然であつて其れは一個の人間として決して不名譽でも恥辱でもありません。體力が劣つて居るために常に男子の保護を要するから　それだから女子は男子よりも劣等な者だと云ふ人があるならば私は其の人に問ひます。そんならば、男子は猛獸よりも體力が劣つてゐると云ふ理由で猛獸よりも劣等なものであると云はれ、其れを承認するか？　と。

婦人の自覺と云ふことは徒らに權利を振り廻したり、强がつたりするのではなく、女性としての自己の特性や位置や、又は、女性の對照物である男性の特質などに付て本當の處を知ることとです。本當の處を知るならば、それ相當の注意も覺悟もある筈ですから、貞操か生命かと云ふような危急な場合に立ち至る筈がありません。

又、萬一、何かの行き違ひから、さう云ふ危急な場合に遭遇したとしても、貞操を破られるか？　生命を奪はれるか？　と云ふ程、貞操觀念の强い、自己を守るに意志

の固い婦人であるならば、何とか其の場を切りぬける工夫を案出すると思ひます。私の知人の實驗談ですが、彼女がまだ小娘の時分にのつぴきならぬ用事のために田舍の夜道を歩いてゐた時に、大男に捕へられて丁度鷲の爪に押へられた雀のようにどうすることも出來ない刹那、彼女はとつさに考へて、快く承諾の旨を告げ、男が安心して捕へて居た手をゆるめ、そして、しなだれかゝろうとする拍子に傍の泥土深い沼の中へ突きとばして置いて逃げてしまいました。

且ッ、又、東京の新聞には見へなかつたようですが『關西婦人新聞』には次のようなことが出てゐました。『事、豫審中で詳しい事は判らないが、鹿兒島市の新聞報によると、頗る嚴格な夫をもつた裁縫師匠の重村お何が同町内の高利貸芝某に六十圓を借受け期日に返濟が出來なくて二度目の延期を依賴に行つた夜、獨身者で酒好きの高利貸が一杯傾け居り、容易に延期を承諾せず、用便に行つた歸途入口の戸に錠を卸し、狢花猥褻の暴行に及ばんとしたので、お何は絶體絶命、夢中になつて有合せの絹紐を男

の頸に二廻りばかり捲きつけ、遂に絞殺した』と。

そして、これは全く正當防衛であります。男は女の生命が欲しいのではない。他に求むるものがあつて夢中になつてゐるのですから、女が冷靜な頭で、賢く智慧を働かせるならば何とか切りぬける工夫が付くし、もし其れが出來なければ萬止むを得ず、向ふの命を貰ふ迄だと思ひます。絶對絶命の場合に相手の命を取つてもそれは正當防衛であつて決して人殺しの罪に問はれるものでないことを私は或る法律家に確めて置きました。

強い貞操觀念の缺乏

けれども、多くの場合、婦人自身が自分の生命を賭して迄も自己を守らうとする強い貞操觀念を持つてゐないと思はれます。(心が顚倒して、唯、わけもなくうろたへもがいて居る間に犯されてしまうと云ふ場合も想像出來ますが) 世間的に美人で一寸有名になつた婦人の直話ですが。彼女は或る有妻男子に或る用件に附て招がれて夜中其の

男の家を訪れました。自分は夫を失つて間のない獨身者であるけれども、先方は有妻の紳士であることに安心して、招じ入れられるまゝに座敷へ上がるや否や、其の男は玄關の掛金をかけてしまいました。變だと思つて様子を見ると彼の妻子を始め下女迄も外出させてあつて、凡ての戶には錠が下してあるし、『本當に私どうしようか』と言葉は途方にくれたことを語るのですが、其の聲音其の表情は嬉しさを包みきれないのでした。彼女は美人だとは云ひながら四十に近いし、五六人の子供の母であることを思つて、私は不快で胸が悪くなりました。

其の外一般には、獸慾の犧牲になるものは何と云つても無知無學な下級勞働階級の婦人に多いと云ふことは誰にでも想像出來ますが、彼女達は夜中人氣のない處で、暴漢に襲はれるならば、彼女の所有する金乃至金に換算出來る品物には手を付けないと云ふ條件で暴漢に身を任せると云ふ例が度々あると云ふことも聞きました。

で、これ等の例は、婦人が本當に眞劍に命を賭して迄も自己を守らうとする意志が

ないことを語つてゐます。

神戸の女敎師が外人に凌辱されたと云ふ報導が出た時には、私が云ふ迄もなく世人は戰慄しました。確かに私も其の戰慄した一人です。どうしたならば彼女を幾分でも慰め得るであらうかと云ふこと迄も考へました。けれども、彼女の『涙の告白』(婦人世界四月號所載)を讀んで聊幻滅の感があります。『しかし今では加害者を別に憎くて耐らないとは思ひません。どうか今度のことで、生れ變つたやうになつて呉れたなら今度のことも滿更意義がない譯でもあるまいと甚だ生意氣のやうですが考へます。しかしそれと反對に、これが基で益々自暴自棄に陷りはしないかと、それが私には案ぜられます。相當に敎養のある人の上に、若い妹があるやうなことを聽いてゐますから人事ならず思ふのです。』

と彼女は云つて暴行者に同情し、そして、其の敵を憎まないことは佛敎の感化だと云つてゐるのですが、佛敎も此處に至つては實に困つたものです。不幸な彼女を責め

るようになることは快くないのですけれども併し道理を明らかにして置くことは今後のためですから申ますが、此の社會が彼女と其の暴行者なる外人と二人切りの社會であるならば、彼女が加害者に同情するなり、又は、慰める態度に出るなり自由です。けれども、最も神聖なる教職にある身が獸慾の道具にされたと云ふことは、日本全體の教職にある婦人に侮辱を與へたことになるのですから、もし、彼女に其の位置に對する自覺があるならば、彼女は日本女教員の名譽のために加害者の生命を要求すべきです。つまり、死刑を要求すべき筈だと私は思ひます。

さう云ふ態度に出るのとは全く反對に不思議な同情を加害者に寄せて居るのかと思ふと、又、其の加害者に對して、一萬圓の慰藉料請求附帶私訴を提起したと云はれてゐます。そして其れは親戚や兄のすゝめだと本人は辯明してゐると云ふことですが、此處に至つて私は、全體としての女教員の名譽のためにいよ〳〵絶望に耐へません。

そして、彼女も亦前に擧げた例に屬する種類の婦人、則ち、强固な貞操觀念の所有

者であつたかどうかを考へさせられるのです。

要するに、私共は、天晴れ文明人のつもりで居るに反して、大部分の男子は機會さへあれば忽ち野獸に變ずるし、大部分の女子は强固な貞操觀念の所有者でなく、自己に餘まりに不忠實であることが事件のある度每に考へさせられます。

婦人を襲ふ外界の惡魔が恐しいことは云はずもがなでありますが、婦人自身の內部にも亦外界の惡魔を招到する小惡魔が存在してゐるので慘劇が演じられるのではないかと思はれるのです。

で、內外のそれ等の惡魔を釀造するものは、社會の濁つた空氣です。ですから、こう云ふ機會を利用して私共婦人は猥褻の行爲の宣傳となる猥褻の言語を弄する者を制裁し、濁つた社會の空氣を淸潔にする工夫をすべきです。何百年來の性慾亂用の遺傳を受け、其の病毒を流布しつゝある人間の大多數から成り立つてゐる此の社會に生活してゐて、法律は其の病源を一掃しようともせず、輿論はあつても無きが如く社會が

無關心であつたのですから、心ある婦人が奮起しなければなりません。

婦人の取るべき態度

我が國一般婦人がまだ社會的に目覺めてゐない結果、一般社會の不利益となつてゐることは、多くの場合に於ては、凌辱されても自分一個の名譽を保護するために暗々裏に其の事件を葬り去つたことでありました。其處へ行くと外國婦人がかくの如き場合に遭遇するならば彼女達は社會の利益と云ふことに付て强い信念を持つて居ますから、直ちに相當な處置を取る態度に出ます。則ち、犯人に對し嚴罰を要求すると同時に公表して社會に警告を與へます。

大野博士の場合の如き、もし、これが米國で起つた事件ならば博士は法律の制裁を受ける迄もなく、辱しめられた娘の父なり又は兄弟に銃殺されてしまひます。銃殺し得る權能が婦人の貞操を守るためには誰にでも與へられてあるのです。さう云ふ風ですから、もし、公衆の前で猥褻な言語を弄するならば、直ちに、罰せられます。

もし、大野博士、及び神戸の暴行外人が僅かの罰で濟んでしまうようなことがあれば、それは女性全體が恥しめられたばかりでなく、一等國の名を負ふ日本國の體面にもかゝはります。世界の列國は日本を差して『名は一等國でも男子の獸性を矯めることを知らない野蠻國だ』と云ふに相違ありません。又、下等な外國男子は『本國に居れば品行を愼しまなければならないが日本へ來れば自由だ』と云ふ態度を取つて居るのを度々見せつけられますが、國家としての品位を上げるに付ても男子の獸性は思ひ切つて嚴罰しなければならないと思ひます。

かくの如き罪惡に對する我が國の法律は實に手ぬるいものであり、社會の輿論はあつても無きが如き有樣であることは前にも一寸申ましたが、こう云ふ社會に生存して居て、腕力に於ては到底男子の敵でない女子が其の貞操を保護するにはどうすればよいか？

先づ、第一着としては、自己の内部に潜む意志薄弱、無自覺と云ふ亡者を追出し、

體力に於ては弱くとも聰明となつて、禍を招ぐような不謹愼な態度を愼しみ、用意周到と云ふことをもつて災害を未然に防ぎ、第二には、同感の婦人達が心を合せて性慾の亂用を招致するような猥褻な言語を弄する者や、不謹愼な行動をする者を制裁する輿論を喚起することに努め、第三には、前述のやうな無責任な言語を弄したり行爲をすることは國民性を墮落させ、災害を多くし、引ひては國力を減退させるものであるから、かくの如き罪惡を嚴罰することが國民の精力を復活させる方法であることを當局者に悟つて貰ふように努めることです。

こう云ふことに關しては、外國も我が國も事實に於ては同じようであるかも知れません。けれども、外國は殊に米國はせめて表面だけでも美しくしようとして國民が總がゝりで努力してゐます。そして、少しでも汚れた空氣を造らないようにしてツイには内部迄も淸潔にして行かうとしてゐます。せめて、其處迄も我が國の一般が氣付くようにしたいものです。

此の社會は天使と惡魔の共同會社であつて、社會の空氣が清潔に　ると惡魔が引つこんで天使が出て來るし、社會の空氣が濁つて來るならば天使が引つ込んで惡魔が出て來る。」とスペンサーは申しました。

惡魔が出て來ても足を入れる處がないように、天使をのみ迎へることが出來るように、私共は、殊に、婦人は此の社會の空氣を清潔にすることに極力努力すべきです。

草間判二氏より……　……　德永保之助氏は愛妻を失はれて悲歎にくれて居らるゝ事を知りました。某大臣の如く『今よりは妻に別れて只一人かりの世なれど淋しかるらむ』等と云つてゐながら忽ち再婚して人を驚かし『手向草露もまだ干ぬあさぼらけ新妻はしとおとゝめぐはす』等と嗤はれる事のないよう切に祈つてゐます。…………　私共も雪中の蟄居より逃れて非常に愉快です。

山に來て薪切る身の今ぞ知る冬の家居は囚はれとのみ

懐中時計の音すみて高し抑ゆれどおどる心よあしたの山路

生みの子は君を守らん故へ兒は君を慕はんとこしへの春（畫師の退職）

怨讐に會ふもさだめぞ惜別に泣くもさだめぞとみ佛はいふ（原田琴子氏及び德永兄に）

タイラニーかアナーキーか
團體生活に關する一考察

目下の思想界を最も有力に支配してゐるものはアナーキーです。文學、哲學、藝術の方面に、殊に、經濟思想の方面に於てアナーキーはその優勢な力を揮つてゐます。そして、この思想を生んだ重なる人はダーウィンとマルサスとスペンサーであると稱せられてゐますが、これ等の學者の終極の論點は生存競爭と云ふ場面の一箇所に集まつてゐます。そして、彼等以來の社會進化論を構成してゐる材料も亦皆この點から出立してゐます。

併し、これ等の學者は彼等の說が人間の進步と云ふ事實を十分に說明してゐるとは思つてゐなかつた。ダーウィンの自然淘汰もスペンサーの適者生存もマルサスの人口過剩論も皆社會進步の祕密を摑んでゐなかつたことを彼等自身が告白してゐます。

處が、その當時經濟學者であつたバジオットは彼の名著『物理學と政治學』に於

てその祕密を先づ摑んだと云はれてゐます。バジオットが論じた問題は、前述の學者のやうに個人々々の生存競爭ではなく、團體の生存競爭を捕へて論じ、その上に團體團結の現象をも合せて論じたのでした。彼は、

『人間の進歩には共同が必要である。共同的團體を造ることによつて人間は始めて進歩の過程に入ることが出來る共同して強い結束力ある團體を造らないならば、他の結束力の強い團體に亡ぼされてしまう。其の強い結束力ある團體を造る團員は、容易にそして直ちに共同し得る程度のほゞ同じやうな人々であらねばならぬ。そしてもう一つ注意すべきは、(共同と云ふものは單なる道理や經濟上の理由の一致によるのではなく、ハートとスピリットの共同でなければならない。ハートとスピリットが結果することによつてのみ有力な團體が造られる。』

と云ひ、そして、ハートとスピリットの一致はどうして造られるかと云ふ質問に對しては『それはタイラニー(壓制)の一つによらなければならない』と云つてゐます。タイラニーと云ふ言葉は現代人の最も嫌ひそして呪つてゐる言葉ですが併し、バジオットの云ふタイラニーとはどう云ふ意味のものでせうか?

私どもが理想とするアナーキーの狀態に到達するには、どうしてもタイラニーの時代を通過しなければならない。合理

的なタイラニーが確實に行はれて、つまり法律の範圍内に於ての自由が益々完全に行はれた後でなければ自由社會は決して生れないと云ふのです。

植物にたとへて云ふならば、土地を選み、種を選み、最善な手段を盡して、その植物が蕾を孕むまではその植物は全然自由を許されない。その植物を支配するものは絶對のタイラニーであります。けれどもその植物がいよ〱蕾を持つ時代に到達したならばその時から以後はアナーキーの時代です。植物は絶對の自由を持つてその生活を營みます。花を開き實を結ぶやうになつたその植物に對しては何等の干渉も必要でありません。

これを他の方面から考へて見ますと物質文明と云へば自然界に存在してゐる材料と力を利用することであり、そして、それを利用するには、頑として動かすことの出來ない法則に從ふことです。つまり、タイラニーの支配に服從することです。光線、熱、引力、水、蒸氣、電氣及び其他のいろ〱の物質が物質文明を造る要素であつて、そして、その物質文明が基礎となつて精神文明と云ふ花が咲きます。精神文明は物質文明の上に載つてゐるとか、又は、物質文明の中から生れて來てゐると云つても、それは決して恥づべきものではありません。他の言葉をもつて云へば、タイラニーの支配を受けて來てゐるからと云つて屈辱を感じる必要は少しもないのです。

この例を經濟的進歩に取つて見るならば、經濟的の進歩はものゝ上に人が働ゝ度に正比例するものです。そして、この事實が歴史的唯物主義を造りました。けれども、それは餘りに雜駁でありました。なぜなら、ものゝ上に人が働くその度に正比例して經濟的の進歩があると云ふその事實の現著なることに眩惑されて、歴史的唯物主義を信ずる人はその裏面に重大なる事實が存在してゐることを忘れました。即ち、人が唯ものに觸れただけでは其處に何物もが造り出されません。けれども、人が道理をもつてものに觸れて行くことによつてのみ人を滿足させるものが造り出されます。

一言で云ふならば、物質文明の裏面には道理と云ふ非常に有力なタイラニーが控へてゐたのです。動かすことの出來ない無形の道理がものに觸れて物質文明となり、そして、その物質文明の上に精神文明の花が咲き、其處で始めて私どもは本當の意味の自由を享有することが出來る。そして、その狀態が即ちアナーキーです。其處に到達する迄は私共には自由がない。もし、あるとすればそれは恐ろしいタイラニーに服從しての範圍内に於ける自由です。

かう考へて來て、さて、私共日本婦人は今そのアナーキーの狀態を現出し得る過程に入つてゐるかどうかと考へて見ると、遺憾ながら其處迄にはまだ非常な距

離がある。まだ〳〵大いにタイラニーを必要とする狀態にあるやうに思へます。

實際に於ては、まだ〳〵大いにタイラニーを必要とする狀態にあるにも拘らずつまり訓練を受けなければならぬ狀態にあるにも拘らず、各人が餘りに自己を主張する處に團結の困難が潜んで居るやうに考へられます。進步の過程に必要なタイラニーの時代を經ずして、いきなり、實際にはまだ非常な距離のあるアナーキーの狀態にあるかのやうに錯覺してゐるそれが婦人の共同、團結を困難ならしめて居るやうに思へます。

之を　又、生存競爭と云ふ方面から考へて見ると、團體の生存も個人の生存と同じやうに生存競爭に耐へて行く丈の條件を備へて居なければなりません。色々の種類の婦人團體が設立されては消滅して行き、起つては倒れるのは、前述の理由に加ふるに、この條件を備へてゐないことに基因して居るやうに思へます。

ダーウインはこの生存競爭と云ふことを四ツに分けてゐます。その第一は反動の努力で、暑さ寒さを避け、自分の位置について自己批評することです。第二は、生命を維持しやうとする努力でこれは重もに疲勞を囘復しやうとすることです。第三は順應の努力、つまり、自分を取り卷いてゐる環境に順應して行かうとすること、そして、第四は調節の努力であります。

で、第一の反動の努力と自分の位置に

ついての自己批評が科學的、美的、宗教的生活を生みました。反動の努力が我慢と云ふこと、勇氣と云ふものを起し、信仰を維持し、ツイに宗教の發達となり、そして、自己の位置を批評することが科學的態度を發達させました。それから、第二の生命を維持しやうとする努力は經濟的生活の發達となり、第三の順應の生活が倫理的生活を生み、其處から克己、自己修正、自己指導となり、第四の調節の努力は、團體生活を爲すに重要な凝集力となりました。人間が社會を設定するにはこれが無くてならない前條件であります。

所謂適者生存と云ふことは、どうしてもこの四つの努力に於て成功してゐなければなりません。つまり、啻に經濟生活に於てのみならず、倫理的生活及び團體則ち調節的生活が必要です。

團體を造る上に於ては、殊に、最後の調節的生活が必要であります。そして、その調節を可能ならしむるものは何かと云ふと、それは、共通の刺戟を相互に受け、暗示を與へたり受けたり、無數の仕方で模倣し合ふことによつて、ツイに、各個人がほゞ同じ感情、同じ思想を持つやうになりますが、それが則ち社會的感情、社會的思想となり、この社會的思想が各人共通の利害のために社會的の仕事をする態度となり、其處に有力な團體は造られます。

この社會的情操は人間の習慣であつて

これをサムナー敎授はフォークウエーと云つてゐますが、このフォークウエーは常に個人の行動を强制してゐるもので、そして、各個人にとつてそれがバジオットの所謂恐しいタイラニーであります。

けれども、このタイラニーがあつたればこそ社會は形成され、統一的行動が可能になり、そして、文明が開拓されたことを私共は考へて見る必要があります。このタイラニーの力で人間は社會化され自覺した信仰の自由を持つやうになり、自覺した同情、確實な理解力を持つやうになりました。ですから、此處から出立して私どもは理想的な新社會の建設に進んで行かなければならないのです。して見ると、現在に於て、私どもの最も必要とする處のものは私どもの終局の理想なるアナーキーではなくて、其處に到達するに絶對に必要なタイラニー（壓制）であります。

各婦人の頭がこの道理を明瞭に諒解しそして、强いタイラニー（壓制）の鞭を甘んじて受けることによつて始めて有力な團體を組織する資格が備はるのである様に考へます。

有閑階級婦人に對する私の實感

普通には有產階級と云ふ言葉が用ひられて居ますが私は、其れを有閑階級と云ふ言葉に切り變へて考へて見ようと思ひます。そして、其の有閑階級の婦人に對する私の實感は三期に渡つて變化して居ます。

少女時代の私の目に映じた有閑階級の婦人は私の羨望の的でありました。

そして、青年時代の私の目に映つた其れ等の婦人達は私を憤慨せしめ私の怨恨の的でありました。

それから、此の頃の私は彼女等の生活がみじめで氣の毒で憫然の情を禁ずることが出來ません。そして此の氣持ちは私の一生を貫いて死ぬ迄續くであらうと考へてゐます。

これは餘事ですが、人は十歳の時と二十歳の時とは其の考へが違ふし、三十歳になれば又考へが變化するし、四十歳になると、又、三十歳の時とは異つた考へを持つやうになるけれども、四十歳後は多くの場合もう變るものでないと云はれてゐますが、私は其れを信じます。それで私は他の問題は別としても婦人問題と云ふやうな、婦人の生活其のものを全般的に及び婦人の一生を通じての問題として解決する人は、其の考へが確定する年齡に達した人が適當であつて、まだどう考へが變るかも知れない年齡であり、且つ、婦人の生活としての經驗の途上にある者に權威を持たせて、其の人に婦人全般が指導されることは非常に危險であると考へて居ります。

さて、有閑階級の婦人に對する私の考へが三期に渡つて變つたこと、及び、其の時々の私の實感に付てお話する前に私は有產階級を有閑階級に切り代へた理由

に付て、極く簡單に申上げて置きたいと思ひます。

一體、有產階級と云ふ言葉は無產階級に對して生れた言葉で、これを他の言葉をもつて申ますなら、資本家階級、勞働者階級と云ふことになるのでありませうが、併し實は其の階級別は非常に曖昧であると私は考へて居ます。例を擧げて申ますなら、私の生家などは農業をして居りますが、家屋敷は先祖傳來のものであり、耕作して居る田畑も自分のものであります。ですから、家屋敷及び田畑を所有して居ると云ふ點から考へますと、確かに有產階級に屬するものであります。

けれども、一家のうちの夫も妻も子供も老人も皆朝の暗がりから晩の暗がり迄勞働して居なければ生計が立たない。子供等は義務年限の尋常小學に通はせるのが精一杯で、尋常小學に通つて居る間にも朝晩は農事及び家事に追ひ使はれて居なければならないと云ふ點から考へると、これは勞働階級に屬して居ると見なければなりません。

又、別な方面に其の例をとつて、給料を仕拂ふ者と仕拂はれる者との間に、有產無產の區別を付けて見ませうか？

給料を貰つて生活して居ると云ふ點では、區辦の小使及び立ん坊から大學敎授及び大臣參議に至る迄皆給料生活者でありますが、どうも、其れ等の人々を無產階級の中に一括してしまふことは出來ないと思ひます同時に、給料を支拂つてゐると云ふ點から考へると小僧を一人使つてゐる駄菓子屋や小間物屋なども三井や三菱も同じでありませうが、併し、どうも其等の人々を同じやうに見て同等な資本家階級と階級づけてしまふことは妥當でないやうに思へます。

其處で、私は有閑階級と云ふ言葉を選みました、つまり、其の日〱の衣食のために、其の日其の日を働いて居なくても生活して居られる人々を指したものです。

○

いろ〱前置きが長くなりましたが、此處で、有閑階級の婦人に對する私自身の實感に移ります。前にも申ました通り、私の生家は家屋敷も田畑も皆自家のものでありますが、其れでも四六時中一家こぞつて働き

通しに働いて居なければなりませんでした。子供も十歳にもなれば朝に晩に弟妹の守りをしたり使ひ走りをしたり、草取りの手傳ひをさせられたり、其の外體力が耐へ得るだけの仕事は常にあてがはれてゐました。忘れもしません、私が十四歳の時です。母が「お前ももうそろ／＼年頃になるのだから、やはらか物（絹物の意）を一重ねこしらへなければなるまい」と申ました。其れ迄はふだん着は勿論よそ行きの着物も皆うちの畑に出來た綿を紡いで織つた手織木綿であつたのです。ですから、村の内の有福な商家の娘が着て居る双子織い着物は可なり華美に見へたものでした。

年頃にならうとする私のために母がどんな着物を工夫したかと申ますと、それは父が婿入りして來る時に花婿として着て來た藍ミジンの糸織の着物を解いて、丈を切つて袖にはぎ合せ大きくして其れを上着とし、祖母が嫁入りして來る時に着て來たと云ふ――其の時には母のものになつてゐました――小紋縮緬を、もう大分いたんでゐるのをツギハギして下着にしたのでした。それでも、とにかく、自分のために非常な苦心の結果絹の着物が出來たと云ふことは大きな喜びでしたそれから、羽織は「これから蠶を養つて糸を取つて」と云ふのでした。

それより先き、私共子供等はよくツバナ摘みに田圃へ行きました。都會にばかり住んでゐる方達は御存じかどうか知りませんが其のツバナの穗がまだスッカリ皮を被つてゐる時には柔くて甘味があつてうまいので一掴み摘んで來ては食べて樂しんだものです。けれども、其のツバナのスッカリ伸びて熟してしまつた穗の綿毛は決して染料を受け付けないものですから、それを綿の中へ混ぜて糸にして織つた布はどんな色に染めても其のツバナだけが赤味を帶びて白くチラ／＼光つて居るので、よそ行きの着物を造る時には母の命を受けて、其のたけたツバナを摘みに行つたものです。

○

其の頃、たま／＼田舍へ來る都市に住む娘達の服裝を見て、其の美しさに私は唯呆然と驚いて居ました。そして、さう云ふ美しい着物を其の娘達は何枚も幾重ねも持つて居るのだと聞かされた時、どうして自分と

彼女達との間にはそんな大きな差があるのかと私は考へ始めました。

　どちらかと云へば、さう云ふことには私は淡白な性質でありましたが、とにかく、私達百姓が一枚の着物を着るようにするには長い間の計畫と苦心と努力が必要であるに反して、都市に住む人々は何の苦もなく努力もなく吳服屋からズン／＼持つて來てはズタ／＼着る。私達田舍の子供等の間食は田圃や野山をあさり歩いてやうやく時々見付ける草の芽や木の實である。其れに反して、都市に住む子供等は菓子製造人が腕によりをかけて造り上げた高價な菓子を飽きる程食ふ。と云ふことを知つた時に、私は『人間生れて百姓などをして居る者は馬鹿なのだ、都市へ出て都市人の着たり食べたりするやうなものを着たり食べたりすることが人生に於ける最大幸福であるのだ』と云ふやうなことを、考へるやうになりました。

　つまり、都市に住む有閑階級の婦人が其の頃の羨望の的であつたのです。働いても／＼足りなくて苦勞をしつゞけてゐる、云ひかへれば、衣食にさいなまれて居る人達ばかりを見てゐる其の頃は、今、云ふ人形が婦人の生活としての最高理想であつたわけです。

　後に、私は都市へ出ました。そして、所謂有閑階級の人々に直接接近しました。自分自身は都市へ出ても故郷に居る自分の肉親と云ふものは片時も自分の胸から離れるものではありません。そして、自分の肉親の者と其れ等の有閑階級の人々とを比較しては『同じ日本國民でありながら』と云ふ憤慨の念を禁ずることが出來なくなりました。田舍に居る時分、理想的生活だと思つて居た有閑階級の婦人を私は憎むやうになりました。

○

　其の後私は米國へ行つたのでありますが、其處でも矢張り日本の都市に居ると同じでありました。所謂奧さんと云ふ名稱の附いた婦人に使はれて彼女のお化粧の手傳ひをしたり、遊惰な我がまゝ勝手な彼女の生活のために追で使はれて居ることが如何にも馬鹿々々しくなつて私は多少裁縫に經驗があるのを幸ひに女中奉公をやめて仕立屋へ這入りました。降つても照つても

朝から晩迄針を握つて一心不亂に着物を縫つて居るのでありましたが、もし、私達の手で出來上る着物が眞面目な人々に合理的に着られるものなら、私に別に何の感じも起さずに針を運ぶことを自分の天職と心得て默々としていつ迄も〳〵其の仕事を續けて居られたであらうと思ひます。

けれども、私を使つて居た仕立屋はサンフランシスコで一流の婦人達を顧客にしてゐる。つまり、有閑階級の婦人が相手になつたものですから、顧客は朝ッぱらから自動車又は馬車を乘りつけて、運轉手なり馭者なりを戸外に待たせたまゝ小半日もかゝつて『あゝでもない』『かうでもない』とむづかしいことを仕立屋の主人に並べ立てゝゐます。そして『今夜宴會があるから何時迄に仕上げろ』とか『明日は芝居に行くのだからかうしろ』とか本當に威張つたもので、私達大勢の婦人達が毎日々々テーブルに縛り付けられて居るやうな氣持ちで働いて居ることなどには氣が付かないかのやうに、此の世の中の婦人は皆自分の虚榮心を滿すために働くべきものと定つてでも居るかのやうに、傲慢な態度をしてゐます。けれども彼女の御きげんを損じないやうに、一日働いて疲れきつた體にもう一度勇氣を付けて夜業をしなければならないと云ふことになります。私は手にある針と布をテーブルの上に叩きつけて其の仕立屋を出てしまはうかと思ひました。

○

これは米國に於ける經驗でありますが、併し、日本の有閑階級の婦人は、さう云ふ態度をしないと云ふことがどうして云へませう。有閑階級の婦人が私を憤慨せしめ、怨恨の的であつたのは、其の頃のことです。

けれども、追々とものゝ眞相を見ることが出來るやうになつた私は彼女達の虚榮がどう云ふ處からきざして來て居るかと云ふ見當が付いて來ましたので、此頃では本當に彼女達を氣の毒に思つてゐます。心の空虚を滿すために、又は、癒されぬ心の惱みを忘れるために衣裝に芝居に其の他の行樂に浮身をやつして居ながらも、しかも、其の空虚な處が滿たされる術もなく、苦惱が拭ひ去られる時の來る見込みもない其の生活が如何にもみじめだと思つてゐます。實は、むしろ、高

がゆい氣が致します。

誤まつた人生觀に囚はれ、不備な結婚に基因する處のあらゆる苦惱を嘗めても、まだ氣づかずに光明ある道へ出ようとはせず、健全な生活に立ち歸へらうとはせず、安價な慰安を求めて進み、丁度、鳥がもちに喰付いたやうにもがけばもがく程益々苦しい淵へ沈むと云ふ狀態になつてゐます。

同じ我がまゝな有閑階級の婦人でも米國の婦人は日本の婦人程卑屈でありません。彼女等は大抵自分自身の財産を持つて居ますから、隨分思ひきつて公共事業にも金を出しますし（其の動機は別問題として）其の上に夫の不貞操に對して強い制裁權を持つて居ますから、自分の心の要求は――其れが間違つてゐることも別問題として――正々堂々と處置して行きます。其處へ行くと我が國の有閑婦人はみじめです。夫が素晴らしい大きな財産を持つてゐても、其れをどうすることが出來るではなし、夫は不貞操のしほうだいです。其れをどうすることも出來ないで、唯コソ〳〵とないしよで他に慰安を求めてゐる姿が、如何にも卑屈でみじめです。

○

このやうな屈辱な不合理な位置に自分等が置かれてあることに付て考へて見ようともせず、どうかしようと云ふ慾望も起さずに、他に慰安を求めて邪路に入つたり、又は、自分の夫が弄んで居る女性と美を競はうとして自分を美化することに腐心したりしてゐるのをよく見受けますが、其れは全く正しい淑女としての自分の威厳を失墜させ、自分を遊女のレベルに引き下げることであると云ふ處に彼女等は氣付きません。

今日迄の婦人に與へられて居た位置が婦人をして其のやうな卑屈なものと爲したのだと云へば其れ迄ですが、それにしても、もう自覺してもいゝ時分です、彼女等の自覺を促す鐘の音は亂打されて居ますけれども彼女等は其れに耳を傾けようとはしません。

たとへ、少しでも文明史をのぞいた者は文明の進歩のために有閑階級が如何に重要な役目を擔つて居たかと云ふことを皆知つてゐます。限定の紙數がもう超過しましたから、それに付ての委しいことは略しますが

とにかく、これだけは云つて置きませう。云ふ必要はない程明らかな事實ですが、併し、冬眠の狀態にある有閑階級の婦人のために矢張り一言云つて置かなければなりません。「人間の全部が皆食ふことに追はれて居たならば、今の人間も何千年前の人間も同じであるに相違ない。けれども、有閑階級と云ふものが出來て、それ等の人々が其の暇を賢く利用し、人間生活の利益のために新しい方面を開拓し開拓して行つて、遂に今日の文明が築き上げられた」のであることを。

ですから、今日の有閑階級にある人々も、彼等が食ふに追はれて居る人々には爲し得ない方面に努力して社會全般の幸福のために貢獻する處があるならば、共同生活が其の組織である今日の社會に於て、彼等の存在の社會的意義は認められ、矢張り、昔の有閑階級と同じように社會全般からの尊敬を受けることが出來ます。

けれども、自階級の社會的意義を悟らず、食ふに困らないと云ふ處から、遊惰な氣まゝな生活を續けて居るならば、それでは社會の寄生蟲視されても仕方がありません。大きな寄生蟲を負ふに耐へないと云ふ氣運が、今、勃然として社會の一角から起らうとしてゐますが、其の勢力のために寄生蟲は早晩叩きつぶされてしまうものであることを、有閑階級の婦人は、今知らねばならぬ時に到達してゐます。

或る畫家が「花の最も美しい時は、今や散らうとする瞬間だ」と申ました。果物の甘味ももう一歩進めば腐敗すると云ふ時です。それで私は有閑階級の婦人の淸煉された美も矢張り其の花の美、其の果物の甘味であるやうな氣がしてなりません。

そして、彼女等が今のまゝの態度を續けて居るならば、其の運命は前述の花及び果物と同じでありますが併し、彼女等は人間です。精神の力を持つて居るものです。ですから、其の精神を入れかへさへするならば光輝ある新しい運命を、自身に開拓して行き得るものであることを私は信じて居るものであります。

猶、また、云ひたいことは所謂勞働階級に屬する職業婦人が、有閑階級婦人を罵しり呪つてゐながら猶且つ、彼女等は有閑階級婦人を模倣することに吸々としてゐる事實でありますが、それに付ては又の機會に於て書きます。

死苦の影像

德永保之助

愛妻を亡ひてより早や二とせを經ぬ。甲斐なきことと知りつつも、今に哀傷追慕の心そぞろとどめ難し。時去り、處を異にせばこのかなしみ消えなむかとたのめしに、かへりていや增る。愚かしと笑はるるも詮なし。いま年頃亡き妻をしのぶ餘り、うたひ出でたる多くの歌の中、數首をこの誌上に乞うて發表し、これを亡き妻の靈にささぐると共に、いささか自ら慰むるよすがとなす。

亡き妻がぬき書きしたる西行の歌のあはれなるいやさらかなしも

死のくるしみそれとも知らで一よさを妻にしのばし[illegible]無殘なるかなや

二十五と云へ子供のごとくきよらけくあどなかりしをあはれ亡き妻

亡き妻の姿かたちの浮びこねしかくも我の一部となれるか

亡き妻とつくりし花壇の大きさの寢棺ほどなるにおそろしくなりぬ

ともに植えしなすび實りぬ亡き妻の靈にそなへむと切れば露ちる

ときじくの木の實を分ちたうべたる妻はも今は亡し一人　らへる

亡き妻のたのしみ待ちし鷄頭の花はあかあか咲けども咲けども

黙々とあさげにつきぬその向きにもはやあらなく愛なしき妻はも

方角がわろかりしならめとふ年寄りの妻を悼む話、それも一理か

亡き妻と五とせあまりほそぼそと立てこしけむりあはれ絶えにけり

骨肉のえにしは君にうすかりしわれをすてしもゑのさだめかや

いとけなくて虐げられし君なりしわがなさけにも生き足らはざりしか

亡き妻の縫ひ仕立てたるわが夜着はほころびにけり誰がつくろはむ

亡き妻よゆるさせたまへわがなさけ尙ほ足らざりき君にたぐへば

生きかへる途もあらなくたまゆらにはかなくなりぬあはれわが妻

今さらに妻の死因を求めえて慰むべうもあらなくかなし

君が死をその日に起きしことのごと日に夜になげく一人し病めば

ただ君を思ひなげかむ長からぬ命にしあればつよくはげしく

たふとしや君が假したる力こそわれを支へこしいのちなりけらし

斷末魔の汝がくるしみの影像を日夜ささざめりわが心臟は

亡き妻とそぞろながめし鎌倉の海は思ふもわりなくかなしや

ゆひが濱に汝がひろひたるさくら貝針箱の抽出のすみに見出でぬ

秋にならば鶏を飼はむと亡き妻のいひくらしけるさ庭は荒れぬ

亡き妻が英語をならふとひたぶるに書き向ひける此のノートぞも

わが妻はローマ字つづりいちじるく上達しけり死ぬ少しまへ

わがこころ生活にめざめて愛情の深まりゆく頃妻は逝きにけり

病ひて費へ一しほ多くなりぬ妻の墓石は何日建つらむか

安からぬいのちを支へれば亡き妻をしのぶることの強くたえせね

亡き妻の木主にむかひ禮拜すかそけきともしの涙ににじむも

世にしあらば妻もまろびむを茅が崎の砂丘の上にわがかぎろへど

富士はわれにめづらくもあらわれひたぶるに妻を呼び生け見せまくほりす　（茅ヶ崎にて）

留守居

原田琴子

旅ゆきし夫はいづこぞ夕まけて吾子が手を引き門の邊に立つ

さくら咲く南に君は旅立てりさびしく吾子とるすゐをする

遊びよりかへりて吾子は父を問ふ旅にといへばさびしげにする

旅ゆきて君がゐぬ間に東京もさくら咲きたりとくかへりませ

南の海よつかれし我背子に涼しき瞳向けはなむけをせよ

下り立ちて庭の草花眺むれどさびしかりけりるすゐのけふは

歸る日の君に見えむと咲きもいでよさ庭に生ふる山吹の花

教育社會學講話（第二十三回）

組織と制度

制度と功績を擧げようとする本能

制度は人間の慾望、又は、必要に歸因すると云ふことは、制度と云ふもの丶一面しか語つてゐません。其處にはもう一面があります。そして、其の二面は社會組織の二面と同じものです。則ち、合理的な方面と本能的な方面とがあります。他の言葉をもつて云へば、知力的な方面と感情的な方面とがあるのです。

私共が一制度としての或る團體に加はる動機は、其れが私共の或る必要を滿すからと云ふ理由ばかりでなく、私共がぼんやりと感じてゐる衝動、則ち、群居的本能、他の言葉を以て云へば私共のうちに潛んで存在してゐる力を他人と共同することによつ

て充分に發揮し、そして、或る功績を擧げたいと云ふ本能があるからです。つまり、必要と云ふことゝ、行爲に對する衝動と、此の二つの要素が凡ての制度の背景となつてゐるものです。

併し、單なる衝動は有益な行爲とならずに有害な行爲となる場合もあり、又、或る仕事を完成するに必要な人員を强制的に集めなければならない場合があります。ですから、とにかく、一制度としての團體は、其の團體の仕事に眞劍になり得る人が局に當ることによつて最上の狀態にあります。

一制度としての團體に必要なもう一つの要素は世間の認容であります。世間が認容することによつて人々は其の團體に信賴するようになります。局に當る人が尊敬される位置に居るようになります。社會的の仕事と云ふものは、その仕事の種類が何であれ威嚴がなければなりません。それは多くの人々の必要を滿さうとするものでありますから。

「自分一人では必要を滿すことも出來ず、解決することも出來ないが、併し、多くの人々が共同することによつて其の目的が達せられると云ふ問題は此の社會には無限にある。そして、其の共同的事業の成功には多くの人々が一體となつて行動しようとする同情が必要である。つまり、競技に於ける『組の感情』が必要である』とジャストロウ博士は申ます。

ですから、團體の中に自分を吸込ませてしまうことは自己を無にすることではなく自己充實であります。それは小自己の殼を破つて自己の人格を擴大することです。何事かを爲さうとする力のうちで最大なるものは或る種類の一社會を造ろうとすることです。一團體の指導者は一個人として立派な人物であるばかりでなく、一公人です。彼は彼が代表してゐる團體の、それが何の種類の團體であれ、軍隊であれ、國家であれ、其の團體の精神を體得してゐる高僧です。彼が統率する會員達の內部に潜んでゐる同胞に對する忠義心に誕生を與へる助産婦であり、會員達の最高な意味に於ける下

便です。

同時に、團體内に於ける分業は共同の目的を達するために最も有効な方法です。會員達のそれ〴〵の異つた能力を最上に發揮させることが出來ますから。それ〴〵の方面の適任者にそれ〴〵の方面を托して置くことは最大力を以て其の方面の流通が行はれることになります。外の人では到底成し遂げることが出來ないことを成し遂げ得ます。つまり、共通の目的のために各々が生きた線となつてゐるのです。そして、其の生きた線となることが有効な會員であるのです。會員としての其義務を充分に遂行するのでなければ有効な會員ではありません。ですから、義務と云ふ言葉は大きな言葉です。義務觀念が存在してゐない處には何物も完成されません。

都市、又は、國家と云ふ制度が建設されました。けれども、それは、我々の商業上有益だとか、經濟上必要だとか、其の外の外面的な事柄のために有益だと云ふ理由で現在の我々が造つたものでなく、我々はそれ等の諸制度の中に生れたのです。ですか

ら、我々に力があるならば、其の力の結果なる、新しい制度を造つて既成の制度なる都市及び國家を改造することが出來ます。そして、これ等の常識的な考へは聯合しようとする我々の本當の動機です。たとへて云ふと、徒黨に於てさへ、其の存在に對する多くの口實がありますず。徒黨が出來る動機は決して本當の意味の有益な動機ではないのです。けれども、凡ての法律や社會制度が出來る本能はそれ等の徒黨を造る本能と矢張り同じものではあるのです。つまり、我々人間には從屬しようとする本能があるからです。

制度と標準

私共の行爲に標準を與へるものは制度です。凡ての制度、或ひは、組織が、一國の政府から一小學校内の或る種類の會に至る迄、其の一員となるために或る一定の標準が必要です。團體は其の團體員となる人々に對して或る資格を要求しますし、其の團體員として自分が適當だと思ふ人は進んで其の團體に加入します。ですから、一制度

としての團體は精選された人々から成立してゐる一社會です。

新會員は舊會員の態度を模倣して其の團體の標準に接近して行かうと努めます。一つの標準に從つて皆それぞ〱の型を造つて行きますから、或る一つの團體、又は、會は他の團體又は會と其の性質を異にしてゐます。且つ又、其の目的及び事業を進めて行くに付ての正式の説明書が凡ての團體及び會には必ずあります。會員の行爲の理想も亦出來るだけ鮮明な色彩を以て表示してあります。そして、其の理想的行爲は多くの場合、模倣によつて實現されます。

『それ故、教師、僧侶、醫師、技師、藝術家は彼等の仲間の間に定まつてゐる何が名譽か不名譽かと云ふ標準に從つて彼等の感情を抑制する。從つて、個人の努力となる。

各政黨、勞働組合、測量隊、及び、運動競技の團體は其の團體の目的のために、人物に對する適當な標準と定則を造る。そして、それが會員を目に見へないよりに壓迫し服從せしむる』と、ロッス教授は云つてゐます。

『人は、自分が厄介だと思つてゐるものを取り除いた時に、先づ自分を處置したものだと云へる。そして、ホッとした氣持ちになる、朝、他の人が自分を起すことの代りに、起床喇叭を鳴響かされるならば、起きることをしぶつて何のかんの文句を云つて居る遑がない。人が寺に這入つたり、嚴重な規則に自分を縛り付けるのはそれと同じことだ。つまり、寺に入つたり嚴重な規則に自分を縛り付けることは、一人で街路をグヅ〱歩いて居ることの代りに、いはゞ道德的自動車に自分の體を任せて走るようなものだ。』と。これはヒユー博士の云つた言葉です。

或る女子大學に於て、最高の名譽を贏ち得て卒業する婦人が、學校を去る前に在學中彼女が屬して居た文學會が、どれだけ彼女のためになつて居るかを書いて貰ひたいと要求されました。彼女は書いてゐます。

『會を造ろうとする考へを私が持つ前には、私は別段これと云ふ望みも目的も持たない行きつきばつたりの人間であつた。私は年上の學生の威風に戰いてゐた。けれども

私は直きに自分の精神を何にかに打ち込んで後れを取らないようにしなければならないと感じ始めた。そして、自分が一つの團體の一部分であると云ふ自覺が私自身の生活、殊に、學生としての生活に對する私の態度を變へてしまつた。其の時迄は私は學校へ來てはう、ち、へ歸へる。唯それだけで自分の行爲や態度に付て考へて見ることもしなかつた。私には何の責任もなかつた。私に何にかを要求する人もなかつた。

『であるから、會の最初の會合に對しては私の胸は戰いてゐた。私は人と人との間には完全な調和があるものだと想像してゐた。けれども、それに反して、ことごとに人々が異つた意見を持つてゐることを發見して驚いた。そして、リンコンが『議論が熱して意見が二つになつてしまつた時には議會の存在が危い』と云つたのを思ひ起したりした。併し、私は、それ等のやかましい議論は皆善意であることを知つた。人の感情を害すような言葉は少しもなかつた。私自身も自分の氣付かない前に同じことをしてゐた。私は或る問題に付て自分の意見を述べるために立ち上がつた時に、非常な嬉

しさを感じた。

『私共の會は外の或る婦人の倶樂部の會員と討論會をすることになつた。外の生徒達のすゝめによつて其の準備會の時に私は選手に選まれた。私は會員達に自分が囑望されて居ることを知つた。私はどうしても勝利を得なければならないことを覺悟した。私は非常な責任を感じた。

『私が大きな其の會を維持し得たのは、社會が心から賛成してゐたからであつた。もし、社會が私の情熱をさまますような態度であつたならば、私は到底それを成し遂げることは出來なかつたのを知つてゐる。會を造つてから一年の後に私は事業を進めて行くに付ての秘訣を悟つた。それで、或る時可なり大規模の新しい事業に付て提案した。自分でも全然疑ひがなかつたわけではなし、又、反對を稱へる會員達もあつたが、併し、私は其の計畫をはつきりと心のうちに描き出すことに努力し、そして、全會員が共力すれば必ず成功することを力說した。ツイに其の議案が通過して、そして、一生

懸命に働いた結果其の努力は充分に酬ひられた。

『私は自分のしたことに對して褒められたり責められたりする度毎に會其のもの丶名が上げられたり下げられたりするように感じた。私の社會的性質や社會に對する理想を造つたものは私の家庭に次ぐに此の會である。學校よりも教會よりも社會それ自身よりも此の會がより多くの影響を私に與へてゐる。』

編輯の後

今日に恐しい烈風です。家々は鳴動し、屋根のトタン板は引きはがされそうです、東京市は灰でつゝまれてしまつてゐます。花の春はこうして終らうとしてゐます。今年の櫻はみじめでした。開き始めようとしてから、雨に會ひ、風にいためられ、冷たい雪を吹きかけられ、雹にさへ叩かれました。まるで、これから開かうとする人間の花の蕾が無殘にも暴行を加へられた象徴でゞもあるかのように

島田某事件が起つた時には本誌の初校が、既でに濟んだ後でした。けれども、此の事件も矢張り大體に於ては本誌『凌辱事件に附て』のうちに論じてあるもの丶中に入るべきもの、つまり、『半獸人』と『不注意』の産物です。そして、世間には女側の不注意不用意を責めてゐる向きも大分あるようですが、併し、不注意であるから犯してもいゝと云ふ理窟は斷じて通りません、不注意な親の子には有害な駄菓子を賣つて子供の健康を害してもいゝと云ふ理由はないと同じように。女側の罪は道徳上の罪にとゞまるもの、これに反して、男の方の罪は刑事上の罪を構成してゐるもので、其處にはつきりとした區別があります。それを混同してはなりません。都合によつては其の邊のことを次號に書いて見ようかとも思つてゐます。

健全な思想の持主なる本誌愛讀者達の御健在を祈ります。（四月十八日）

本誌定價表

一冊	六冊	十二冊
金二十五錢	前金 金壹圓四十錢	前金 金貳圓七十錢
送料五厘	（送料共）	（送料共）

▲誌代及郵税は前金の事▲御送金の際は振替貯金東京五三六八八番に御拂込みのこと▲郵券代用は五厘切手にて一割增▲廣告は御照會次第御相談いたします

大正十二年四月廿三日印刷納本
大正十二年五月一日發行
東京四谷區南伊賀町四一
編輯兼發行人 山田嘉吉
東京神田區仲猿樂町十七
印刷人 大杉直次郎
東京四谷區南伊賀町四一
發行所 婦人と新社會社
振替東京五三六八八

山田わか著譯書目

- 家庭の社會的意義（定價二圓八十錢）東京神田區仲猿樂町一七 近代文明社
- 社會に額づく女（定價二圓三十錢）東京麹町區平河町六ノ一 耕文堂發行
- 女（マグダレン・マルタス原著）（定價二圓八十錢）東京麹町區平河町六ノ一 耕文堂發行
- 若き愛と智の眼覺（定價一圓二十錢）牛込區新小川町三ノ十九 日本社
- 婦人の解放と性的教育（定價七十錢）本郷區湯島天神町一ノ八二 東洋出版社發行
- 再版 戀愛の社會的意義（定價二圓）東京市四谷區南伊賀町四一 婦人と新社會社
- 女・人・母（ウイバー女史原著）（定價一圓七十五錢）東京本郷春木町二丁目 森江書店發行
- 八時間勞働の理論と實際（定價四十錢）本郷區湯島天神町一ノ八二 東洋出版社發行
- 愛と生活と（マイナー女史原著）（定價一圓三十錢）東京神田裏神保町六番地 三德社發行
- 賣笑婦の研究（定價一圓六十五錢）東京麹町區飯田町一ノ二 天佑社發行

回婦人回問題回研究回資料回

婦人と新社會

第一卷 二圓五十錢
第二卷 三圓
第三卷 三圓

合本

總クロース金字入美本 送料各十五錢

回内容主要目次回

京區町 市南四 四[illegible]一
婦人と新社會社
振替口座東京五三六八八

英語自由教授

獨、佛、西
羅甸初步

○予が教授の趣意○

○予が英語教授の目的は、一般士人たるに必要な根本の智識を、主として英書に依つて獲得せんとする篤志者に對し、之を補助し之を奬勵するにある

○予が多年の經驗に依れば、撰擇宜しきを得た若干の書籍を、適當な順序で正確に讀破することは、專門家たるを要せぬ一般讀書子に取りて、眞に多大の効果がある。「今日の眞の大學は印刷した書籍の倉庫である」とカーライルは云つた、讀書子は大學に入らずに、能く學者たるの識見を養ひ得ることは、今や何人も之を認むる所である。現代の多くの男女にとりて、大學や高等の諸學校に入るは、容易のことではない。故に學校以外にある篤學の士は、最も善き種類と最も適當なる課程の讀書に、其餘暇を利用し、獨り靜かに智識を貯ふべきである。

○故に予は、書籍の撰擇と讀書の順序とに、特別の注意を拂ひ、以て篤志な獨學者の友となり、他日その人をして、如何なる社會に立つとも、決して恥かしくないだけの學識を修得させたい考である。

○特に予は、篤學な婦人の爲に、婦人問題の研究を勸めたい。苟くも現代、進歩主義の男女にして、予が如上の志を諒とする諸君は、予が私塾に於て、有ゆる便宜と厚遇とを享くるの特權を有する。

◆略則

△教授科目□日用英語□英文學□政治、經濟、法律、哲學、宗教、社會學等に關する英文名著の講讀及び講義□獨、佛、西、及び羅甸語初步

△時間（午前八時より午後八時まで）

△休日（土曜、日曜及び祭日）

△月謝□二十分間五圓□四十分間十圓

○入學の日より其翌月の同日までを一ケ月とし總て前納の事

△束脩金貳圓

□尚ほ英文和譯、和文英譯の需めに應ず

東京市四谷區
南伊賀町四一
山田嘉吉

